



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第75号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2016-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73643
Type	journal
File Information	DRFmonthly_75.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第75号

No. 75 April, 2016

【特集】RDA 総会
【レポート】第4回 SPARC Japan セミナー

DRF オンラインワークショップ開催報告
【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常

【特集】RDA Seventh Plenary Meeting

2016年3月1日から3月3日にかけて科学技術振興機構: JST との共催によるRDA: Research Data Alliance の総会が東京にて開催されました。アジア地域では初開催となるこの総会と、これに先立って開催されたデータシェアリングに関するシンポジウムの模様を特集としてお届けします。



Photo by: DRF

—RDA (Research Data Alliance) とは

RDAは、欧州委員会、米国国立科学財団、米国国立標準技術研究所、オーストラリア政府イノベーション省を中心として、2013年3月に正式に発足しました。スローガンとして“Research Data Sharing without Barriers”（障壁なきデータの共有）を掲げ、複数の分科会や利益団体の活動を中心に、グローバルな規模での研究データの共有の基盤整備のために活動しています。複数の機関によるサポートのほか、個人メンバーも広く募集しており、2016年3月現在、欧州、北米を中心に世界100カ国から4,000人弱のメンバーが参加しています。総会は年に2回のペースで開催されており、研究者や図書館員など、世界中から研究データ共有に関心の高い人々が集まってきます。

DRF 企画ワーキンググループ員募集中！

DRF 企画ワーキング・グループでは、一緒に活動して下さる仲間を募集しています。
ご応募・ご質問などはお名前、ご所属、ご連絡先を明記の上、下記までご連絡ください。
※DRF参加機関所属の方に限ります。
※主な活動内容 ワークショップなどの研修・集会イベントの企画運営/協力、月刊DRFの作成・発行
募集締め切り: 平成28年4月28日（木）
応募先 デジタルリポジトリ連合事務局（北海道大学附属図書館学術システム課）js@lib.hokudai.ac.jp
（正式な委嘱手続きは事務局からご本人にご連絡します。）

RDA Seventh Plenary Meeting

—研究者参加者からのレポート

私にとって、昨年3月のサンディエゴに続き、2回目のRDA総会です。1回目は、一部の日程しか参加できなかったこともありますが、研究者が通常出席する国際会議と大きく違うため、モヤモヤした感じが残りました。今回、その解消のために、自分の興味ではなく、異なる活動ステージのミーティングにバランスよく出席して、全体像の理解に務めました。

まず、RDAの中心的な活動母体としてWorking Group (WG) とInterest Group (IG) があります。他に、より初期的な活動として、Bird of a Feather (BoF) が総会で開かれます。どれも、なんらかの成果が求められており、例えば、勧告

(Recommendation) を出し、広くフィードバックを求めます。

典型的には、まず、総会でBoFを開き、問題を特定したり、興味ある人を集め、その後の活動につなげます。BoFはWGやIGへの移行が期待されています。例えば、“Data Search”では飛び入りを含めたデモがあり、今後何をすべきかなどが熱く議論されました。

WGとIGの違いは活動期間と期待される成果にあります。IGの期間は定められていませんが、WGに移ることを含め、なんらかの文書が成果物になります。一方、WGでは1年半程度の期間で実際に動くものなどが期待されます。例えば、“Data Citation WG”では、すでに勧告を出しており、実際にデータセンターに導入してもらう段階に入っており、BoFとは違う熱さを感じました。

システムだけでなく、データ利用に関する慣習や法的な議論を行なうIG/WGもあります。また、RDA以外で類似の活動をしているグループとの協同も模索するセッションも多くあり、RDAの柔軟さを感じました。初日のパネルで事務局長のMarkさんが「RDAはニュートラルな場であり、ここに集まる人が強みである」といったことを述べられましたが、そのことがよく理解できました。

池田大輔 (九州大学 システム情報科学研究院 准教授)

—図書館職員参加者からのレポート

RDAがどうも重要らしい、最初に聞いた時には「目録のRDA? ではないよな・・・」というぐらいの印象でした。多くの図書館員のイメージはそんなものではないでしょうか。しかしオープンサイエンス周辺では、国内外のどこに行っても、RDAが話題に上ります。データのほうのRDAは、とにかく動きが速くて強力らしい、ということで、一体、どんなもんなんだろう? と気になっていました。

やはり、実際に参加してみてもわかる事もあります。いくつかのセッションに参加しましたが、scopeとか、impact、nextstepがきちんと示されることが印象に残りました。フォーマットがそうなっているのだと思いますが、分科会案内のページでも、「分科会の趣旨はこうで、参考情報源はこれこれで、対象者はこういう人」ということが明示されています。実際の分科会の進行においても、全般的にサクサクとアジェンダ通りに進み、今後の進め方を決めてから終わります。マネージメントがきちんとしていると感じました。このあたりは、ぜひとも見習うべきではないでしょうか。セッションの最初に参加者一人一人に自己紹介が求められます。人数が多いとそれだけで20分以上かかりますが、それも印象に残っています。

研究データのハンドリングに関するトレーニングのセッション (IG Education and Training on handling of research data: Focus on Research-Data handling related competences and skills) にも参加しました。[1]ここで research librariansのEssential skillsについても少しだけ触れられました。下記ページにそのリストがあり、参考情報源も含めて記載されています。量が膨大ですが、当日のスライドでは (So far)と書かれていて、プレゼンターも、まだまだこれから!! という感じでニコツと笑われていました。その辺の雰囲気は、参加してみないとわからないなあ、と思いました。

[1] <https://rd-alliance.org/node/971/all-wiki-index-by-group>

三角太郎 (千葉大学附属図書館)



Photo by: DRF

開催日: 2016年2月29日

Open Symposium: Data-driven Science – The trigger of Scientific development



Photo by: JST

一 科学技術振興機構：JST 主催のシンポジウム参加レポート

2月29日（月）、一橋講堂にて開催された「データシェアリングシンポジウム 科学の発展への起爆剤～データ駆動型科学の推進に向けて～」（主催 科学技術振興機構：JST）に参加しました。メイン会場は予約満席となっており、別室にサテライト会場が設けられるなど、データに関する動向への関心の高さが窺えます。

午前中は政府関連機関・国際機関を中心に、主に政策レベルの取り組みに関する講演が行われました。オープンサイエンス・データ共有を推進していく上で課題となる事柄（インフラや制度的側面など）に関しては、日本と欧米で大まかに共通した認識がある一方、日本における政策についてはまだまだ具体性には欠けるという印象を受けました。しかしながら、世界においてもオープンサイエンスの具体的なカタチは模索段階なのだろうという感想も抱きました。政策などによるトップダウンのアプローチの重要性を認めながらも、RDAのようなコミュニティや各ステークホルダーによる草の根的・ボトムアップ的な活動も必要不可欠であるといった意見が複数の講演者から聞かれました。

午後のセッションでは、まず、様々な分野で実際に研究に携わる方々より、それぞれの分野の中でのデータ共有の取り組み、共有における今後の可能性などについてお話がありました。字数の関係で詳しい内容には触れませんが大変興味深い内容でしたので、公開資料[1]もご覧いただければと思います。発表後には、午後のセッション発表者によるラウンドテーブルが行われました。データそのもの、研究者の意識など様々な点において分野ごとに様々な違いがあるようですが、データ公開、データベース作成などに関する評価の確立が必要ということは、ある程度の共通認識であるようでした。ラウンドテーブルの最後は「そもそもなぜオープン化が必要か？何をどう良くしていくためのオープン化か？」などの議論も今回のシンポジウムや日本でのRDA 総会開催をきっかけに、国内において行われていく（べき）だろう」ということで締められました。

有機的な側面を持つこの課題に図書館がどのように関わっていくかは今後、さらなる検討が必要かと思います。しかしながら、学術情報の保存・発信を一つの業務としてきた図書館もステークホルダーの一員であることに間違いはありません。図書館においても、業界内・外を含め、様々なレベルで議論を行っていくことが、今後の学術情報流通を形作る上で重要になっていくのでしょう。

[1] <https://jipsti.jst.go.jp/rda/>

第4回 SPARC Japanセミナー2015

3月9日（水）、第4回SPARC Japanセミナーが開催されました。「研究振興の文脈における大学図書館の機能」というテーマのもと、4名の方々が登壇し、オープンサイエンスを中心にパネルディスカッションが行われました。会場には大学図書館関係者をはじめ、学術機関、出版社等、多くの人が集まり、関心の高さがうかがえました。

◆尾城孝一氏（東京大学附属図書館）

電子ジャーナルの購読、機関リポジトリの拡大、購読モデルからの脱却に関する統計データや海外の事例を紹介しながら、大学図書館による、「読み手（読者）」としての研究者支援から「書き手（著者）」としての研究者支援への転換と、新たな研究支援の可能性について述べられました。

◆引原隆士氏（京都大学図書館機構長・附属図書館長/京都大学工学研究科）

現在の日本の研究者、および学会を中心とした研究者コミュニティが抱える課題、オープンアクセスが学術情報の生産、流通、グローバル化する研究環境にもたらす変化や可能性について言及されました。推進のためには、オープンアクセスの理念や意義を理解した賛同者を増やす必要があるという考えが示されました。

◆真子博氏（内閣府）

政策立案者という立場から、国際動向、日本が進む方向について、検討会での議論や報告書のその後のフォローアップを中心に説明がありました。G7茨城・つくば科学技術大臣会合で「オープンサイエンス」を取り上げる予定であり、ますます活性化が期待される一方、必要な人材像を描ききれていないという課題もあるとのことでした。図書館に対しては、自らの機能を今一度、明示し、研究者にコミットしていく姿勢が求められました。

◆有川節夫氏（前九州大学総長）

これまでの大学図書館のあゆみを、答申・建議・基準等を踏まえながら概観し、それを受けて九州大学での取り組みが紹介されました。研究者と共同して教育・研究するために、大学図書館に対しては、編集・出版機能の強化、人材育成、統合領域に対応するための組織改編等が期待されました。

◆パネルディスカッション

市古氏（慶應義塾大学）の司会により、「どうすれば大学図書館が日本の研究力向上に寄与できるか」という議論が行われました。オープンサイエンスの主役は研究者であり、オープンサイエンスに関わるとことは、研究や研究者にこれまで以上に関わることです。そのためには、研究者コミュニティへのプレゼンス向上、機能強化、そもそも研究データを扱うことができるのかなど、課題も多く、決して甘い道りではありません。ひるまずに、変化していくことが期待されるという意見や、また、図書館（員）の機能や能力が外から見えにくいという指摘がありました。図書館はオープンサイエンスの先に何を見ているのか、何ができるのかを、研究者、大学執行部、URA、技術職員、出版界や学会に対して示し、議論しながら進めていくことが求められると思いました。

末田 真樹子（神戸大学附属図書館）



SPARC JapanのWebページでは発表資料が公開されているようじゃぞ！

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160309.html>

Photo by:NII



DRF オンラインワークショップ 「研究データから研究プロセスを知る」開催報告

実施期間 平成27年11月18日（水）～3月25日（金）
参加者数 14機関14名
実施方法 メーリングリスト及び無料グループウェアを用いた班討議、各参加者による研究者インタビュー
成果物 研究データインタビュー事例集（自然科学、人文・社会科学、生命科学、理工・情報科学）
主催 デジタルリポジトリ連合

研究者が日ごろの研究で扱うデータにどのようなものがあるのか調査することで、機関リポジトリでデータを扱おうとする担当者の一助とし、さらに、データをきっかけとして研究プロセスを詳細にヒアリングすることにより、研究プロセスに即したサービスを円滑に提供できるようにするため、標記ワークショップを開催しました。

14名の方にご参加いただき、分野ごとに4つの班に分けてインタビュー項目の検討から、参加者各自でのインタビューの実施、成果物として事例集の作成を行いました。作成した事例集はDRFのWebサイト (<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?onlineworkshop2015>)で公表しています。

参加者アンケートの結果、インタビュー項目を運営側から提示するのではなく、参考資料を元に班内で検討することにより、オープンサイエンスに対する理解が深まったとのご意見を複数いただいた一方、開催時期が年度末にずれ込んだため、研究者との連絡に時間がかかったという問題点もご指摘いただきました。

昨年度に引き続いてオンラインでのワークショップでしたが、班討議にグループウェアの掲示板等を利用することでこれまでの議論や現在抱えている課題の可視性が高まり、昨年度のメールベースの勉強会に比べて議論に参画しやすくなったように思います。また自機関での作業を設けたことで参加者間の負担の偏りを比較的軽減し、DRFならではの「みんなでやってみる」というワークショップの一形態を提示できたのではないのでしょうか。

DRF企画ワーキンググループでは今後も、機関リポジトリ担当者の皆様やオープンアクセス・オープンサイエンスに関心のある皆様のお役に立てるようなワークショップを開催したいと思っていますので、ご要望等がありましたらお気軽にお聞かせください。

Photo by: DRF



↑3月3日(木)、機関リポジトリ推進委員会が行ったパデュー大学マイケル・ウィットさん（ワークショップで参考にしたポスターの作成者）との懇談会にて、ワークショップについて報告を行いました。ウィットさんからは「研究データの扱い方を考えていく上で、このようなインタビューはとても良い経験になる」といったコメントをいただきました。

かたつむりと
オープンアクセスの日常

日本の学協会誌掲載論文の機関リポジトリ収録率は2.7%
Only 2.7% of articles published in Japanese society journals have been deposited in institutional repositories.

2016年3月発行の『情報管理』誌に、「日本の学協会誌掲載論文のオンライン入手環境」と題した論文を掲載いただきました[1]。これは同志社大学の授業の一環として、学生と共同で行っていた調査の結果をまとめたものです。詳しい内容は本文をご覧ください。今回の連載ではそのうち機関リポジトリに関する部分に加えて、追加の分析結果についても紹介したいと思います。

『情報管理』掲載論文では、2002～2013年に日本の学会・専門団体（以下「学協会」）が発行する雑誌に掲載された論文のうち、どれくらいがオンラインで手に入るかを、データベース等を使って調査しています。調査の元になる論文のリストはSCPJとCiNii Articlesを使って作成しました。最終的に調査対象となった論文は120万9,674本で、これらについてまず、CiNii Articles経由でオンライン版を手に入れられるかを調べました。その際、単に手に入るか否かだけでなく、機関リポジトリ等のソースごとの状況も見ています。

ソース別に見ると、もっとも多くの論文を公開しているのはCiNii自身（NII-ELS）、次に多いのがJ-STAGEでした。機関リポジトリはその次、3番目に公開論文数の多いソースでしたが、公開数は3万2,165本で、学協会誌掲載論文全体の2.7%にとどまっています。この研究のさらに先行研究にあたる2012年の調査では[2]、学協会誌掲載論文の機関リポジトリ収録率は1.8%だったので、1.5倍に伸びた...とも言えるのですが、まだまだ誇れるような割合ではないでしょう。

以下からは『情報管理』掲載論文には書かなかった詳細情報です。まずせっかくSCPJを調査の土台にしているので、学協会の著作権ポリシーと機関リポジトリ収録状況の関係をしてみると（表1）、当然ですがグリーンやブルー等、機関リポジトリへの収録を認める方針の雑誌の方が収録率が高くなっています。学協会の著作権方針が明らかになっていることには意味があると言えます。分野別に見ると（表2）、物理学や医学で収録率がやや高く、農学や工学、社会科学等で収録率がとりわけ低くなっています。

また、機関リポジトリ収録論文数の多い雑誌を集計すると、最も収録論文が多いのが『東京医科大学雑誌』（2,205本）で、以下、“The Kitakanto Medical Journal”（1,654本）、『物性研究』（1,570本）など、学協会の体裁はとっているものの、事実上特定の大学・研究機関を中心に編集されている雑誌に掲載された論文が多いことがわかります（『物性研究』は京都大学基礎物理学研究所中心の雑誌）。これは[2]の先行研究でも指摘されていたことで、このような紀要に近い性格の、それゆえ機関リポジトリで公開しやすいだろう、学内学会誌とも呼べるべきものを除いてしまうと、学協会誌掲載論文の機関リポジトリ収録率はさらに下がります。

『情報管理』掲載論文ではCiNii Articlesでの公開状況のほか、J-STAGE、メディカルオンラインへの収録状況、さらにGoogleを使ってどこかで公開されていないかのサンプリング調査等を行っています。その結果、分野を問わなければ日本の学協会誌掲載論文の7割はオンラインで手に入りそうなのがありました。しかし、人文系（オンライン入手可能な論文43.7%）や社会科学（同じく51.5%）では未だに多くの論文が紙でしか閲覧できないこともわかっています。機関リポジトリが最適な手段なのかはわかりま

せんが、紀要の電子化と同じような貢献ができれば、多くの研究者・学生にとって助けとなることでしょう。

表1. 雑誌の著作権ポリシーと掲載論文の機関リポジトリ収録率

		収録なし	収録あり
Green	度数	71,255	3,201
査読前・後のどちらでもよい	%	95.7%	4.3%
Blue	度数	558,761	17,613
査読後の論文のみ認める	%	96.9%	3.1%
Yellow	度数	8,082	57
査読前の論文のみ認める	%	99.3%	0.7%
White	度数	162,409	2,315
リポジトリへの収録を認めない	%	98.6%	1.4%
Gray	度数	377,002	8,979
検討中・非公開・無回答・その他	%	97.7%	2.3%

表2. 雑誌の分野と掲載論文の機関リポジトリ収録率

		収録なし	収録あり
物理学	度数	82,702	3,791
	%	95.6%	4.4%
医学	度数	405,999	17,649
	%	95.8%	4.2%
総合領域	度数	26,433	1,018
	%	96.3%	3.7%
人文学	度数	76,612	1,647
	%	97.9%	2.1%
生物学	度数	55,693	1,040
	%	98.2%	1.8%
化学	度数	40,869	602
	%	98.5%	1.5%
社会科学	度数	136,847	1,923
	%	98.6%	1.4%
工学	度数	270,742	3,456
	%	98.7%	1.3%
農学	度数	57,957	633
	%	98.9%	1.1%

[1] <http://doi.org/10.1241/johokanri.58.908>

[2] <http://doi.org/10.2964/jsik.22.77>



佐藤 翔

（同志社大学 助教）

ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」 管理人
<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>

【次号予告】

【連載】今そこにあるオープンアクセス ほか

■ デジタルリポジトリ連合 月刊DRF ホームページ
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

■ Facebook もやっています！

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

■ 月刊DRF読者アンケート受付中！

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

■ 月刊DRFでは、みなさまからの便りをお待ちしています
gekkandrf@gmail.com